

越境する梵文写本

—中世のヒマラヤ地域と南アジアにおける物と人の交流の一側面—

加納 和雄

Sanskrit Manuscripts Crossing Cultural-Boarders in Medieval South Asia and Himalayan Area

KANO Kazuo

Abstract : Among Sanskrit manuscripts transmitted from South Asia to Himalayan Area (and *vice versa*) around the 11th to the 15th centuries, there are examples which clearly show the fact that they crossed cultural boundaries. In the present paper, we shall trace the cross-cultural exchanges by focusing on such manuscripts mostly preserved in Tibetan Autonomous Region. We can classify these manuscripts into the following categories: Sanskrit texts written on Tibetan papers, Tibetan texts written on Indic palm-leaves or birch barks, Tibetan memos written on margins of Sanskrit manuscripts, Sanskrit-Tibetan bilingual manuscripts, and those who have no specific visual characteristic but whose texts clearly show traces of cross-cultural interchanges (e.g. on the basis of their colophons). According to this tentative classification, we shall specify particular characteristics of these manuscript dealing with selected examples (including manuscripts involved with Atiśa, gNur Dharma kirti, Vibhūticandra, Yar lung Lo tsā ba, a Ya tse king, and Vanaratna) and overview their historical backgrounds.

关键词：西藏梵语写本文化，越境，貝葉写本，紙写本，11-15世紀頃

Keywords: Tibet-Sanskrit manuscript culture, Crossing cultural-boarders, Palm-leaves, Paper manuscripts, 11th to 15th centuries

1 はじめに

およそ11-15世紀頃に南アジア（とくにサンスクリット語が直接に理解される地域）からヒマラヤ地域（とくにその翻訳が必要とされる地域）へと請来された梵文写本の中には、異文化間を越境したことを顕著に示す稀書がいくつか存在する¹。この時期は当該の地域における物と人の交流がとりわけ著しく、その痕跡を如実に示す文献や遺品が比較的豊富である。本稿では、当該地域における物と人の交流の一端を、とくに具体的な形をもつ遺品の中に垣間見たい。とりわけ、チベット自治区に伝存する例を中心に扱う。

2 越境を示す写本の外形的特徴

まずそれら遺品、おもにチベット自治区に伝存する梵文写本について、外形的特徴から類型化を試みたい²。南アジアとヒマラヤ地域に伝存する写本について、写本素材（貝葉、樺皮、紙）の産出地と筆記地という二点を指標として、その二つの地域が一致する場合と、一致しない場合とを分類してみると、次のようになる。なお以下には梵本に加えてチベット文字とヒマラヤ地域産の紙も含める。

写本素材産地と筆記地が一致する場合（通常の植生分布に沿った素材と文字の使用）

〔素材とその産地〕	〔使用文字〕	〔本稿での略称〕
紙（チベット）	チベット文字	蔵紙蔵文 ³
貝葉（東インド）	東インドの文字	貝葉梵文
樺皮（カシュミール）	シャーラダー文字	樺皮梵文

¹ 「越境」という言葉には「不法に」のニュアンスが含まれることもあるが、ここではそれを意図しない。「境」の設定については、〔東〕インド／チベット／ネパール／カシュミールという地理区分を基本的に扱う。今回用いる梵文写本の書写地と流布地はこれによってほぼカバーされる。相互に異なる地域であるとの認識が当時の資料所出の言語表現から確認される、半ば地理的、半ば観念的な雑駁な区分を指す。14世紀以前のチベット人の理解していた南アジアの地理については、Huber (2008: 70) を参照。なお「越境する写本」は、写本の成立の段階で異文化間の交流が深く関わっている点で、単なる請来本とは異なる。

² なお、この類型は観念の上のものではなく、筆者が披見してきた実例にもとづくものである。

³ チベットあるいはヒマラヤ地域産のダフネなどを紙材とする写本素材を便宜上、蔵紙と呼ぶ。ヒマラヤ地域産の紙については、池田ほか（2003）、Helman-Ważny (2014) などに詳しい。

写本素材産地と筆記地が一致しない場合（将来者が越境後に筆記又は素材を輸入し筆記）

[素材とその産地]	[使用文字]	[本稿での略称]
紙（チベット）	東インドの文字	蔵紙梵文
貝葉（東インド）	チベット文字、シャーラダー文字	貝葉蔵文
樺皮（カシュミール）	チベット文字	樺皮蔵文

上掲のうち「一致する場合」が示すのは、人の流通を想定しなくてよい、日常において筆記された一般的な写本である。いっぽう「一致しない場合」が示すのは、何らかの事情によって筆記者が移動して異郷で入手した素材に文字を書いた、あるいは異郷から持ち込まれた写本素材に文字を書いたことを予想させる、特殊な写本である。すなわち文字（または写本素材）が、普段流通している地域を超えて使用された痕跡を示す。後者は、異文化間を越境した事実をそのまま外形に留めている。

なお、この時代に南アジアとヒマラヤ地域において、ヒマラヤ地域産の紙に書かれる文字はおもにチベット文字であり、カトマンズなどで梵文の紙写本が広く流通するのは、16世紀以降のことである。したがって同時期の同地域において梵文紙写本は、いまだ少数派であった⁴。

以上は、素材と文字を指標とした分類であるが、書かれた文字の種類のみに関心を当てると、次のような特殊な写本の現存例が確認できる。

ひとつは、本文の言語とは別の言語（文字）で覚え書きが書き込まれる写本である（蔵文覚書）。チベット自治区伝存の梵文写本には、写本の欄外や行間にチベット文字のメモ書きが書き込まれる例が多数確認される。これには写本成立の当初から二言語を理解する者が関与した例と、その写本が越境した後に、他言語話者が追記した例とがある。

もうひとつは、いわゆる二言語（バイリンガル）写本である。ひとつの写本上に、同一内容のテキストが、梵蔵二言語（または多言語）によって並列して筆記される写本である（梵蔵並記）。

以上、チベット自治区に伝存する、11-15世紀頃に成立した、越境を示す写本の類型の例として、蔵紙梵文、貝葉蔵文、樺皮蔵文、蔵文覚書、梵蔵並記という外形的な特徴をもつ写本が存在する点について確認した。ただしこれらを

⁴ なお、梵文紙写本は、15世紀以前のカトマンズにおいても少数ながら報告されており、11世紀のもの確認されている。Kellner (2009/2010: 166-167 n. 16)、安江 (2011) 参照。いっぽう中央アジアでは、かなり古い時代から梵文の紙写本は流布している。

複合的にあわせもつ写本もあるし、またいずれの外形特徴をもたないが、奥書などからそれが、越境を示す写本と判断できるものもある（後述3.5）。そのため、上記の類型が包括的なものではなく、便宜的な目安にすぎない点は留意されたい⁵。

このように類型される写本が越境した方向は、チベット自治区に伝存する例をみると、南アジアからヒマラヤ地域へと向かったものが多い。しかし中にはヒマラヤ地域から南アジア、そして再びヒマラヤ地域へともたらされた（往復した）例もある。これらの実例をひとつずつみてゆくと、個別の写本がそれぞれに抱える歴史がみえてくる。

3 越境を示す写本の例

上に確認した、蔵紙梵文、貝葉蔵文、蔵文覚書、梵蔵並記といった越境を示す写本の外形上の類型にしたがって、次にはその実例をいくつか概観したい。本稿では各例の詳細については割愛し、おおまかな概観を示すに留める。

3.1 蔵紙梵文写本

アティシャの旧蔵本

アティシャ（Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna, 980–1054）が東インドからチベットへと将來した、彼の蔵書の梵文写本のセットが、紙写本としてチベット自治区に伝存する。そこに記された文字の書体から判断するに、それら紙写本の成立年は、アティシャの生きた時代からそれほど隔たっていない可能性がある。その写本の紙材については、目下、現物や鮮明なカラー写真が閲覧できる状況にはないので、その判定は難しいが、ルオジャオ氏や Do rgya dbang drag rdo rje の記述に従うならば、ダフネなどを紙材とした、いわゆるヒマラヤ産の紙とみられる⁶。これらアティシャの旧蔵本は、彼の没後にレティン寺の什宝として、20世紀初頭にいたるまで、代々保管されてきた。同寺は20世紀前半に二度の災難に遭い、いま現在そこに写本はもはや存在しないが、その一部は20世紀初頭にダライラマ13世からロマノフ朝の皇帝ニコライ2世に贈与されたものとして現

⁵ 写本に関連する素材については、その他、経木、筆記具、墨（インク）についても素材の分析が進めば、当時の物の流通状況が明らかとなると期待される。

存し、別の一部は紆余曲折を経て現在ポタラ宮に所蔵される。当該の紙写本は、中世のチベットにおいて、伝承の過程で貝葉から紙へと書き写された可能性がある。同写本セットの由来、流伝の歴史、内容については、加納（2012）、Kano（2015）を参照されたい。

ヴィブーティチャンドラがチベットで筆写した蔵紙梵文写本

インド仏教終焉期の13世紀初頭に東インドからチベットへと亡命を余儀なくされたヴィブーティチャンドラ（1170-1250頃）⁷の手によってチベット紙に書写された梵文写本が、目下、二例知られている。ひとつは『プラマーナヴァールティカ・ヴリッティ』、もうひとつは『プラマーナヴァールティカ・アランカーラ』の写本である⁸。両者とも奥書において彼の名が筆記者として記載される。前者『ヴリッティ』は、もともとサキヤ寺に保存されていたようだが、のちにシャル・リプクに移され、紆余曲折を経て現在はラサ（おそらくチベット博物館）に移管されている。後者『アランカーラ』は、いまでもサキヤ寺に保存される⁹。『アランカーラ』については、2012年8月サキヤ寺にて現物を披見する機会に恵まれ、チベット紙を素材としている点、確認した。『ヴリッティ』も白黒写真から判断するに、『アランカーラ』と同じ紙材と考えられる。

これら二つの写本は、サキヤ寺旧蔵ないし現蔵であることから、筆記者ヴィブーティチャンドラが入蔵後に、サキヤ寺に逗留した1209年頃に書写された可能性がある。『ヴリッティ』の写本には、補遺として彼自身が書き込んだメモ

⁶ Do rgya dbang drag rdo rje (2016: 72-73) 参照。その一部の白黒写真については Obermiller や松田和信氏が公開している。加納（2012: 153）、松田（2015）参照。なお Do rgya dbang drag rdo rje (2016) によると、この写本セットの中のひとつの作品『因明正理門論』は、その影印が『チベット自治区貝葉写本総集影印』（bod rang skyong ljongs ta la'i lo ma'i dpe cha kun btus par ma、未公開）において写本番号（dpe rtags）ZX0728-BG421として収録されるという。5枚（または5面、ldeb）、大きさは51.2×8.3cm という。

⁷ Stearns (1996)。

⁸ そのほかに彼の書写になる貝葉写本も伝存する。Steinkellner (2004: 9-12)、加納（2009: 61 n. 66）など参照。

⁹ Sāṅkṛtyāyana (1937: 11)、dGe 'dun chos 'phel (1941: 28-29)（試訳）『『プラマーナヴァールティカ・アランカーラ』プラジュニヤーカラグプタ御著。長く平たい大きな紙に13行程度で記されており、第2章と第3章 [がある]。これは、カチェパンチェンの御伴でいらしたヴィブーティチャンドラの親筆であり、サキヤで記されたもののようだ。[彼は] その後、異郷に來たゆえの困難を憂う偈頌をいくつかインド語で書いている。ターラナータの価値ある記述を補足するものとして、ヴィブーティチャンドラがジェツンタクパ（Grags pa rgyal mtshan, 1147-1216）にお辞儀をせず不敬をなしたなどと仰ったことを証拠づけたことになるだろう」、Steinkellner (2004: 9-12)、Kellner (2009/2010: 166-167) 参照。

が数枚付されている。補遺の多くは写本のメインテキストを補充する内容であるが、その中には彼の自作詩の草稿とみられる一枚が含まれている。そしてその一枚には、彼が自身のチベット滞在中の不満と暇願いを、おそらく彼の師シャーキャシュリーバドラに向けて、陳述し懇願する表現が確認される。このような詩稿の内容は、これら紙写本が彼のチベット滞在中に書かれたことを補強する。つまり彼は、逗留先のチベットにおいて、貝葉よりも調達しやすい紙を、書写の素材として用いた、という事情が想定される¹⁰。

後者『プラマーナヴァールティカ・アランカーラ』の梵文紙写本は、奥書に「北の地で」(uttarasyām) 筆写されたことを述べ¹¹、Kellner (2009/2010: 167) はこの記述に基づいて、この写本が彼のチベット滞在中の1204-1214年に記されたと予想する。「北の地」がチベットを指すことは、本稿で後述する『十万頌般若』写本奥書からも支持されるため¹²、筆者もこの予想に賛同する。

ヤツェから贈呈された梵文紙写本

現物、写真ともに未見であり、その行方すら知られてないが、1930年代の報告書に記載される、ひとつの梵文紙写本が存在する。その写本は、大きさ $8\frac{1}{4} \times 2\frac{1}{4}$ インチ、43枚からなる完本であり、表紙にはチベット文字で、「ヤツェ [王] によって贈られた『現観莊嚴論』、『法法性分別論』、『中辺分別論』在中」と記されると報告される¹³。そしてこの写本は1930年代当時、ツァンのポカン寺に所蔵されていたと報告される。そのため、ヤツェ (現ネパール西部スルケート)¹⁴から、ポカン寺に縁のある人物へと贈呈されたとみられる。

同報告書には、この写本の奥書が転写されている。試訳を示すと次の通り。「現観莊嚴論という般若波羅蜜多の口決、完。世尊弥勒の御著。… (中略) …サンヴァット1370 (西暦1313年) 2月2日、スラクシェートラ (現スルケート)

¹⁰ 近刊拙稿「ヴィブーティチャンドラの詩稿」(『印度学仏教学研究』収録予定) 参照。

¹¹ Sāṅkṛtyāyana (1953: 649 n. 3): “likhitā bhūticandrena bhikṣuṇā jñānakāṃkṣiṇā | yad aspaṣṭam aśuddham vā taj janāḥ kṣantum arhatha | likhitālaṃkṛtir uttarasyām |.” 試訳「知を求める比丘ブーティによって筆写された。[本写本の中で] 不明瞭ないし不正確なこと (記述) について、[これを読む] 方々は御寛恕くださいますようお願い申し上げます。北の [地] において、[本書] 「莊嚴」は筆写された」。

¹² Sāṅkṛtyāyana (1937: 30 n.1).

¹³ dGe 'dun chos 'phel (1941: 21), Sāṅkṛtyāyana (1938: 162-163, n.1): “ya-tse-bas-phul-ba'i Mngon-rtog-rgyan, Chos-chos-nyid-rnam-'byed, Dbus-su-mtha' rnam bzhugs.”

¹⁴ ヤツェについての先行研究は、Heller (2009: 20-30) および Ryavec (2015: 96-98) 所掲の諸論文を参照。

において、諸王の王にして観自在なる吉祥リプマツラ王の御世（1312-1314年在位）における今現在、あらゆる振る舞いにおいて輝かしい我が師たる吉祥なる学者マンジュシュリー（？）の御為に…（中略）…シュリージーヴァダラによって筆写された」¹⁵。

この奥書にもとづく、1313年2月2日に西ネパール、現在のスルケートにおいて筆写されたことが知られる。14世紀の西ネパールにおいて紙が梵文写本の素材として用いられ、それがチベットへと献呈されたことを示す貴重な例である。また『法法性分別論』の梵文原典はいまだ発見されていないので、写本に記されたテキストの内容もまた貴重である。筆者が2004年9月にポカン寺を訪ねたときには、当時の建造物もほとんど残っておらず、在住の僧にたずねたところ、写本の行方は不明とのことだった。いずれどこから発見されることが期待される。

ヤツェからチベットへ贈られた写本は他にもある。ゲンドウンチューペル（1903-1951）は、1930年代シャル・リプクに蔵されていた、「ヤツェから軌範師ウーセルセンゲ（'Od zer seng ge）宛に贈られた」という表題をもつ、『瑜伽師地論』『声聞地』『菩薩地』の266枚の良質の、幅の短い写本（貝葉か）の存在について報告する¹⁶。ウーセルセンゲは、サキヤの執政官である第13代ブンチェン職に就いた人物（1315-1317在位）を指すとみられる¹⁷。ヤツェはサキヤ政権と親密な関係を保っており、これらの写本は寄進物とみられる。ヤツェからチベットへと贈られた梵文写本は、当時の人的交流を明かす史料として貴重であり、その詳細は別稿で論じたい。

3.2 貝葉蔵文写本

このように紙に梵文が記される例は多数確認されるが、いっぽうで貝葉の上にチベット文がメインテキストとして筆記される例は、非常に少ない。なかで

¹⁵ Sāṅkṛtyāyana (1938: 163, n. 2): “prajñāpāramitopadeśaśāstraṃ || kṛtir bhagavata āryamaitreyasyeti || || saṃvat 1370 (vik? = 1313 A.C) phālgunavadi 2 sani dine || suraksetre || rājarājeśvaralokeśvaraśrīpumalladevarāṅgye || tasmin kāle varttamāne || sakalaprakriyāmvi (?) rājambaguroḥ (read: sakalaprakriyāvirājasvaguroḥ?) śrīpaṇḍitamūṇjaśrīsyā (?) rthe (sic for °mañjuśrīyo 'rthe?) || śrīvāstavyānvaye paṃ (sic for 'yaṃ?) | śrījīvadhareṇālekhi ||.” テキストの再検討と正確な訳については別稿を期す。Petech (1984: 108-109 n.) も参照。

¹⁶ dGe 'dun chos 'phel (1941: 26). 彼の梵文写本調査については加納（2010）参照。

¹⁷ Petech (1990: 144-145), Deleanu (2006: 53ff.). ウーセルセンゲは後に第17代として1328/9年まで再任する。

図版1：入菩提行論注の貝葉藏文写本（ポタラ宮）



も、貝葉の上にチベット文のみが記される写本として筆者が確認できたのは、一例のみである。それはポタラ宮所蔵の什物の図録に掲載される（図版1）¹⁸。残念ながら全葉の写真は得られないが、目録所載の一枚の写真から、貝葉数枚にわたって記されるチベット文字が確認できる。そのチベット文字を読み解くと、プラジュニャーカラマティ作『入菩提行論注』の一部であることが確認される。この写本を記した人物は不明だが、チベット文字を記すために紙ではなく貝葉の使用を余儀なくされた状況を鑑みるに、チベットの外部で記された可能性が想定される。場合によっては、『入菩提行論注』のチベット訳者自身によって記された写本かもしれない。その訳者は、現存のテンギュル所収本奥書によると、Dar ma grags とされる¹⁹。

これとは別にもう一例、チベット文が本文として記された貝葉を含む写本がある（大正大学によって影印版が2001年に刊行）。この写本では、インドの文字とチベットの文字が混淆して使用されている。すなわち、梵文を当時の東インドの文字で書写した部分と、梵文をチベット文字筆記体（ウメ字）に転写して書

¹⁸ 西藏自治区文物管理委员会（1982: 88）。

¹⁹ チベット大蔵経デルゲ版3872番 fol. 288a6-7；北京版5273番 fol. 325a3-4: mkhas pa chen po su ma ti kī rti dang lo tsā ba dar ma grags kyis bsgyur ba'o || dbu ru byang ngos (P: phyogs) skyung (P: lhung) ka mkhar grags su || mkhas pa chen po blo gros bzang grags pa || ldong stong mchod gnas rgya sgom mched grogs kyis || gsol ttab dge slong dar ma grags kyis bsgyur ||.

写した部分と²⁰、チベット文をウメ字で記した部分からなる。そしてこの写本セットの奥書によると、筆記者は gNur dharma kirti なるチベット人であることがわかる²¹。しばしば自分の名前を梵名で語っていた当時のチベット人知識層の風習を省みると、Darma grags と Dharmakīrti は同名とみなしうるため、この人物を、上記のポタラ宮所蔵の貝葉蔵文写本『入菩提行論注』の翻訳者その人と考えたことも不可能ではないだろう²²。

上記二点を比較してみると、貝葉の体裁、大きさ（ただし目測による）、チベット文字の筆致がよく一致する。また貝葉の上にチベット文がメインテキストとして記される例は極度に限られ、しかもほぼ同名の人物が関与している。これらの状況証拠を総合すると、これら二つの貝葉蔵文写本に同じ人物が関与した蓋然性は高い。この仮説については稿を改めて詳しく論じたい。

なお本稿で扱う時代範囲における樺皮蔵文の確認例としては、ラダックからの出土例がある。これはチベット語で記された翻訳仏典が樺皮の上に筆記された写本である²³。その他、梵文貝葉写本の欄外などにチベット文字が書き加えられる例は、きわめて多いが、これについては以下（3.3）に別に論じる。

3.3 蔵文覚書

しばしばチベット自治区伝存の梵文写本においては、チベット文字の書き込みが確認される。そのパターンは様々あり、例えば、本文の奥書やそこに出る著者名や題名をチベット語に翻訳して欄外に書き込む例、作品本文に他書が引用されるときに所引の書物名をチベット語に翻訳して書き込む例、作品のタイトルをチベット語に翻訳して表紙頁などに記す例、本文の梵文に錯簡があることをチベット語で注意書きする例、本文の一部をチベット語に訳して欄外など

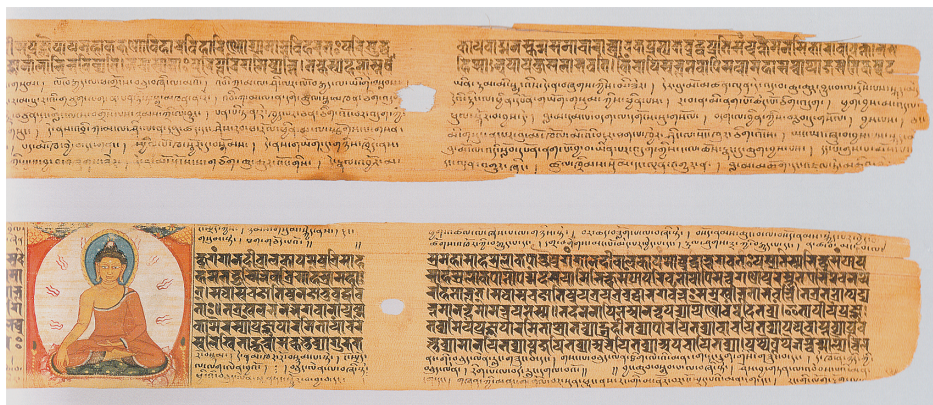
²⁰ 梵語のチベット文字転写は、チベット仏教前伝記に既にみられる。『唯識二十論』の敦煌写本の冒頭において「インド語で」(rgya gar skad du) 以下に提示される梵文題名や、『翻訳名義集』などがその例である。

²¹ Yonezawa (2001: 4-5) (2016: 109).

²² ただし綴り方は dar ma grags、dharma grags、chos grags など様々あるため、確定に至るには慎重な吟味を要する。また『入菩提行論注』の共訳者である Sumatikīrti なる人物が、rNgog Blo ldan shes rab (1059-1109頃) としばしば訳業を共にした Sumatikīrti と同一人物であるならば、この仮説は成り立たなくなる。件の Dar ma grags pa は12世紀のアバヤーカラグプタのもとで学んだ人物であり、年代が合わないからである。

²³ Helmut Tauscher 氏のご教示による。同写本は未公開であり、詳細については正式な報告を待ちたい。また、タイプは異なるが、貝葉の上にシャーラダー文字が筆写された写本も存在する。Ye & Li & Kano (2013) 参照。シャーラダー文字は通常、樺皮の上に記される。

図版2：蔵文テキストを含む八千頌般若梵文貝葉（ポタラ宮）



に書き込む例などがあり、その梵文写本を学んだチベット人たちの思考の跡が克明に残されている²⁴。

この類型に含まれる写本のなかには、欄外の余白面積が大きな写本において、大量のチベット文が書き込まれる例もある。とくに顕著な例は、ポタラ宮に所蔵される、大きさ57cm×8cmの『八千頌般若』梵文貝葉写本である。ポタラ宮の目録所載の影印からその一部が確認できる（図版2）²⁵。この貝葉写本には、その事情は不明ながら梵文の本文が記される面積が少なく、余白の多い頁がいくつか含まれている。その余白箇所において、まとまった量のチベット文がウメ字で記されている²⁶。そのチベット文字の書体から判断すると、14世紀頃よりも古いものとみられる。それらチベット文字を読み解くと、そこにはパダンパサンギェの伝記と密教に関する口決とが綴られていることが確認された²⁷。たしかにパダンパサンギェは般若経を重んじたことが知られるものの、このチベット文の書き込みと梵文本文との関連は依然として不明である。インド滞在中のチベット人が何らかの事情で、書写素材に窮し、手元にあった余白

²⁴ たとえば Rāhula Sāṅkṛtyāyana が1930年代にチベットで撮影した写真版の紙焼きにはそのような例が多数確認される。上記の例の一部は、たとえば Göttingen Xc14/1, 14/25, 14/39など参照。紙焼きはゲッティンゲンの州立兼大学図書館において閲覧可能であり、その詳細は加納（2009）を参照されたい。

²⁵ 尼瑪旦増主編（2013: 122-125）。

²⁶ ただし分量についてはメモ書きの範疇を超えており、内容についても梵文本文とチベット文との関連性は不明であり、必ずしもメモ書きとは呼びえない側面もある。

²⁷ Dan Martin 氏により比定され、ご教示頂いた。目下、同氏のご協力のもと翻刻と試訳を準備している。

にチベット文を書き込んだ可能性も皆無ではなかろう。その歴史的事情の解明については、今後の課題としたい。

なおこの分類 (3.3) に含まれるものとして忘れてはならないのが、写本の保持者の名前がチベット文字でメモ書きされる例である。一般的に、写本の保持者の名は、梵文奥書の中に示される場合もあるが、チベット語のメモ書きとして梵文写本の冒頭頁ないし最終頁の余白に書き込まれることも稀にある。そのような覚書は、写本の由来と伝承を明かす稀有な史料となる²⁸。

3.4 梵蔵並記写本

チベット自治区伝存の梵蔵並記写本の現存数はかなり限定され²⁹、例えば、最近刊行された『アムナーヤマンジャリー』や、『アムリタシッディ』の写本が知られている³⁰。チベット紙が用いられ、1枚につき梵文原文が3行ほど記され、各行に並行してそれぞれに対応するチベット訳文が記されている。梵蔵を対照させたそのような写本が作成されたいきさつや目的については定かではないが、体裁から判断して、写本の書き手がチベット人である可能性が高い。チベット人による梵語学習などが念頭に置かれて作成されたと予想される。

なお、これらと体裁は酷似するが、チベット文の原文を梵語に翻訳して、両者を並置する梵蔵並記写本も存在する。梵文を原典とする先述のケースとは逆のパターンである。たとえば、ソナムギャムツォ (1424-1482) が師ヴァナラトナ (1384-1468) に宛てた手紙はその一例である³¹。

この類型 (3.4) に分類される写本は、たしかに越境という事象を示すが、いっぽうでチベットにおける梵文写本の受容という側面がむしろ大きい。すなわち既に梵文写本がチベット文化の中に深く組み込まれた時点において成立したバイリンガル写本の例といえる³²。

²⁸ このような例を蒐集した資料集については、Kano (2015: 114-117) 参照。

²⁹ ただしチベット語、ウイグル語、漢語、モンゴル語などが並記される例を含めるならば、その数は飛躍的に増える。また、梵蔵並記写本において辞書的なものを入れると、古くは敦煌文獻のなかにいくつか例がみられる。たとえば九世紀の『翻訳名義集』(Mahāvyūṭpatti) などその一例である。

³⁰ 写本の詳細については順次、苦米地 (2017)、Mallinson (2016) を参照。

³¹ Erhard (2002) 参照。なお同書簡は、全集所収本としてのみ伝存し、オリジナルの書簡現物の体裁などは不明である。

³² その影響は広くチベット撰述作品にもみられ、例えば作品題名をチベット文の原文で提示し、そこに梵文に翻訳した題名をインド文字(主に装飾的なランジャナ書体)で並記する例は多数存在する。

3.5 外形的特徴をもたない例

これまでみてきた例は、写本素材と文字という点から、視覚を通じて、異文化の混淆という事象を直感的に示すものであった。いっぽうで、このような外形的な特徴をもたないものの、越境という性格をはっきり表し出す写本も存在する。ここではそのような写本を二例紹介したい。その二例はともに、見た目はありきたりの梵文具葉写本であるが、奥書などによって、異文化間を越境した事実が裏付けられる写本である。

ひとつは、チベットから発注され、カトマンズの書写職人たちが書き写した、『十万頌般若』の梵文具葉写本である。四帙からなり、各帙の奥書にはそれぞれ、施主名（発注人）、筆記者名（下請け）、および書写年代が明記される³³。施主はサキャ在住のチベット人だが、その名が梵名で *Kīrtidhvaja* と表記される³⁴。そのもとのチベット名は、*Grags pa rgyal mtshan* に対応する。*Sāṅkrtyāyana* はこの人物をサキャ五祖のひとり、法王タクパギェルツェン（1147-1216）に同定する。しかし当該写本の成立年代（1283-1284）が後者の没後となってしまうため、年代が合わず、この同定には無理がある。

タクパギェルツェンという名は同名異人が複数知られるが、時代的に適合する人物のひとりに、ヤルルン・ローツァワ・タクパギェルツェン（1242-1346）という者が存在する³⁵。彼の活動の軌跡を、彼が訳業に携わったテンギェル諸作品の奥書から抽出してみると、まさにこの写本と同じ時代、同じ場所で、つまりサキャやカトマンズにおいて活躍したことが確認される³⁶。またテンギェル作品の奥書には、サキャのブンチェン職から命を受けて訳出作業を行った例もあるため、同じようにこの『十万頌般若』梵本も、サキャ政権を後ろ盾として、政権の委託を受けて作製された可能性もある。

もうひとつの例は、いわゆる「ヴァナラトナ写本」（*Vanaratna Codex*）と呼ばれる梵文具葉写本である³⁷。この写本は、「最後のパンディタ」と呼ばれる、東

³³ *Sāṅkrtyāyana* (1937: 30 n. 1) に奥書が転写される。*Sāṅkrtyāyana* (1937: 28, no. 210) 所掲の『入法界品』も同一依頼人による。

³⁴ 例えば、*Sāṅkrtyāyana* (1937: 30 n. 1): “*deyadharmo 'yam pravaramahāyānāyāinām śrī-uttarāpatha-saskya-adhivāśina-pañḍitaśrīkīrtidhvajasya*” 参照。*saskya* はサキャ寺を指す。ただし *dGe 'dun chos 'phel* (1941: 15) に「『十万頌般若』断片、二章から十六章まで、長い写本、上等、尊者タクパゲンツェンが特にネパールで記し自ら校正なさったという写本断片、他の三者はサキャ寺にあり一つはここにある。」と記され、梵文翻刻文からは読み取れない内容もしくは彼独自の解釈までもが示される点は注意を要する。

³⁵ van der Kuip (2009: 29ff.).

³⁶ van der Kuip (2009: 26-29).

インド出身のヴァナラトナ（1384-1468）の私蔵本である。注目すべきは、チベットに伝わる道果説（ラムデー）の教えをチベット語から梵語に訳出した作品を収録する点である。奥書には、道果説の師子相承の系譜を記し、チベット人の相承者たちに続いて、系譜の末尾に自らの名前を連ねている。そこからは、インド仏教が衰退した15世紀当時、チベットから仏教を再輸入して復興を目指す意図が感じ取られる。この写本はカトマンズにおいて伝承されてきたものだが（現在はケンブリッジ大学のホジソン・コレクション所収）、テキストの内容については、ヒマラヤから南アジアへの仏教の流伝の方向性を示す稀有な例であり、これまでみてきた例とは対照的である。梵文写本にみる越境の双方向性を示す好例といえる。

4 おわりに

本稿では、11-15世紀頃に成立した、チベット自治区に伝存する梵文写本を中心として、南アジアとヒマラヤ地域の諸文化の間を越境しながら成立した写本について、実例をもとに素描した。越境という特徴を視覚的に示すものとしては、蔵紙梵文写本、貝葉蔵文写本、蔵文覚書、梵蔵並記写本の例をいくつか紹介し、その次に、外形的な特徴はもたないが奥書やテキストの内容から越境という特徴をはっきりと示す例を紹介した。本稿で挙げた例を、ごく大雑把に時代順に並べ直して示すと、下記の通りである。

Atiśa 旧私蔵本（蔵紙梵文）

gNur Dharma kirti 筆写本（貝葉蔵文、cf. 図版1）

Vibhūticandra 筆写本（蔵紙梵文）

Yar klungs Lo tsā ba Grags pa rgyal mtshan 依頼『十万頌般若』梵本（貝葉梵文、外的特徴無し）

ヤツェからの献呈本（蔵紙梵文）

Pha dam pa 伝記を含む『八千頌般若』梵本（蔵文覚書、図版2）

Āmnāyamañjarī（蔵紙梵蔵並記写本）

Vanaratna 写本（貝葉梵文、外的特徴無し、蔵文梵訳本）

本稿で示した分類および扱った各例の考証の多くは、いまなお調査途中の段

³⁷ Isaacson (2008).

階にあり、いわば中間報告の域を出ない。今後は、まず各例に焦点を当てて、ひとつずつ詳細を明かすことによって、訂正ないし補強を重ね、それらを統合した結果、全体像がより鮮明な形で浮き上がってくることが望まれる。

参考文献

[中文]

尼瑪旦増主編 (2013). 布达拉宫珍宝馆图录. 北京: 中国藏学出版社.
西藏自治区文物管理委员会 (1982). 西藏布達拉宮. 香港: 上海人民美術出版社。

[日文]

池田巧、山中勝次、中西純一 (2003). 『活きている文化遺産 デルゲパルカン』
東京: 明石書店。
加納和雄 (2009). ゲッティンゲン所蔵の仏典梵文写本管見—『バンドルスキー
目録』序文の和訳—, 『高野山大学論叢』44: 31-63頁。
加納和雄 (2010). ゲンドウンチュンペー著『世界知識行・黄金の平原』第一章
和訳—1930年代のチベットにおける梵文写本調査記録—(1), 『密
教文化研究所紀要』23: 63-103頁。
加納和雄 (2012). アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本—1934年
のチベットにおける梵本調査を起点として—, 『インド論理学研究』
IV: 123-161頁。
苦米地等流 (2017). Abhayākara Gupta 作 Āmnāyamañjarī 所引文献—新出梵文資
料・第1～4章より—, 『大正大学総合仏教研究所紀要』39: 99-136
頁。
松田和信 (2015). 華嚴経「普賢菩薩行品」第78-121偈の梵文テキスト, 『イン
ド論理学研究』VIII: 255-268頁。
安江明夫 (2011). ヤシの葉から紙へ: ネパール写本研究ノート, 『学習院大学
研究年報』58: 87-114頁。

[欧文]

Deleanu, Florin. (2006). *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamarga) in the*

- Sravakabhumi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- dGe 'dun chos 'phel. (1941). *rGyal khams rig pas bskor ba'i gtam rgyud gser gyi thang ma*. Ed. Zam gdong pa Blo bzang bstan 'dzin. Sarnarth: Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- Do rgya dbang drag rdo rje. (2016). Rigs sgo'i legs sbyar ma phyi dang 'brel ba'i gnad don kha shas skor rob tsam gleng ba. *Bod kyi ta la'i lo ma'i dpe cha zhib 'jug* (藏文版) 2016: 64–78.
- Erhald, Franz-Karl. (2002). *Life and Travels of Lo-chen bSod-nams rGya-mtsho*. Lumbini: Lumbini International Research Institute.
- Heller, Amy. (2009). *Hidden Treasures of the Himalayas: Tibetan Manuscripts, Paintings, and Sculptures of Dolpo*. Chicago: Serindia Publications.
- Helman-Ważny, Agnieszka. (2014). *The Archaeology of Tibetan Books*. Leiden, Boston: Brill.
- Huber, Tony. (2008). *The Holy Land Reborn: Pilgrimage and the Tibetan Reinvention of Buddhist India*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Isaacson, Harunaga. (2008). Himalayan Encounter: The Teaching Lineage of the *Marmopadeśa*: Studies in the Vanaratna Codex 1. *Manuscript Cultures Newsletter* No 1. Autumn/Winter 2008: 2–6.
- Kano, Kazuo. (2015). Transmission of Sanskrit manuscripts from India to Tibet: In the case of a manuscript collection in possession of Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna. Carmen Meinert (ed.) *Transfer of Buddhism Across Central Asian Networks (7th to 13th Centuries)*. Leiden, Boston: E. J. Brill. 82–117.
- Kellner, Birgit. (2009/2010). Toward a Critical Edition of Dharmakīrti's *Pramāṇavārttika*. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 52/53: 161–211.
- van der Kuijp, Leonard W. J. (2009). On the Vicissitudes of Subhūticandra's *Kāmadhenu* Commentary on the *Amarakoṣa* in Tibet. *Journal of the International Association of Tibetan Studies* 5: 1–105.
- Mallinson, James. (2016). *The Amṛtasiddhi: Haṭhayoga's tantric Buddhist source text*. Draft. Open access: <https://soas.academia.edu/JamesMallinson>.
- Petech, Luciano. (1984). *Mediaeval History of Nepal (c. 750–1482): Second, thoroughly revised edition*. Serie Orientale Roma LX. Rome: Istituto italiano

per il Medio ed Estremo Oriente.

- Petech, Luciano. (1990). *Central Tibet and the Mongols: The Yüan - Sa-skyä. Period of Tibetan History*. Serie Orientale Roma LXV. Roma: Istituto per il Medio ed Estremo Oriente.
- Ryavec, Karl E. (2015). *A Historical Atlas of Tibet*. Chicago, London: University of Chicago Press.
- Sāṅkrṭyāyana, Rāhula. (1937). Second Search of Sanskrit Palm-leaf Mss. in Tibet. *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 23-1: 1-57.
- Sāṅkrṭyāyana, Rāhula. (1938). Search for Sanskrit Mss. in Tibet. *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 24-4: 137-163.
- Sāṅkrṭyāyana, Rāhula. (1953). *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṅkāraḥ of Prajñākara-gupta (Being a Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttikam)*. Tibetan Sanskrit Work Series I. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute.
- Ye, Shaoyong, Li, Xuezhu, Kano, Kazuo (2013). Further Folios from the Set of Miscellaneous Texts in Śāradā Palm-leaves from Zha lu Ri phug: A Preliminary Report Based on Photographs Preserved in the CTRC, CEL and IsIAO. *China Tibetology* 20: 30-47.
- Stearns, Cyrus (1996). The Life and Tibetan Legacy of the Indian Mahāpaṇḍita Vibhūticandra. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 19-1: 127-171.
- Steinkellner, Ernst (2004). *A Tale of Leaves. On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future*. (2003 Gonda Lecture.) Amsterdam: Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences.
- Yonezawa, Yoshiyasu. (2001). *Introduction to the Facsimile Edition of a Collection of Sanskrit Palm-leaf Manuscripts in Tibetan dBu med Script: General Survey*. Tokyo: Taishō University.
- Yonezawa, Yoshiyasu. (2016). sTeng lo tsā ba Tshul khriṃs 'byung gnas: Tibetan Translator of the *Vinayasūtravṛtti-abhidhāna-svavyākyaṇa*. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 64-3: 105-112.

(平成29年度科学研究費補助金26284008、16K13154、17K02222、17H04517、上廣倫理財団学術研究助成による研究成果の一部。)

加納 和雄（かのう かずお）
駒澤大学

岩尾一史・池田 巧（編）
『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』
京都大学人文科学研究所 2018年3月刊
